

〒132-0039

東京都江戸川区東小松川二丁目一七

泉福寺

電話・FAX 〇三(三六五二)九四二八

鳩になつて



江戸川
被爆者の証言

江戸川原爆犠牲者追悼碑の会・編

あの日

それまでのすべてを失ったあなた

どうかこの夏の陽が

ふたたび黒く変わることはないようにと

佐藤祝子「夏の陽は」より



江戸川原爆犠牲者追悼碑

碑にこの記録を捧げる

相川 弘

4

△その日▽

放射能被爆者の回想

浄園 満成 (長崎)

6

いまなお、語れないことが

銀林 美恵子 (広島)

7

「水を供えてください」―姉の最後のことは 堤久吉 (長崎)

10

鉄の棒ねじが左手に

佐々木 玲子 (広島)

11

「水をください」

久保 享 (長崎)

13

☆追悼碑除幕式での体験談☆

地獄の道を走る

矢部 キヨ子 (広島)

14

巨大な火の玉の下で

中山 鈴子 (長崎)

18

晩第一六七一〇部隊の被爆

本田 孝夫 (広島)

21

学友の死を背に

田川 時彦 (広島)

28

きれいな青空だったが

梅沢 武次 (広島)

29

△その日から▽
思い出すままに
妻の叫び
わが子をなくして

林きくの（広島・故人） 31
高木 留男（広島） 32
渡辺 和子（長崎） 34

■執筆者紹介

■あとかき

コラム

- 原爆犠牲者追悼碑「建立のことば」 9 □新たな平和運動の高
まり 14 □被爆者援護法制定をめざして／被爆者援護法案のため
の要求骨子 20 □東友会・被団協 30 □親江会 36 □広島・長崎
の被害／原子爆弾の破壊力 37 □区長随想（「広報えどがわ」よ
り） 38 □追悼碑のできるまで 38

表紙絵／丸木位里・俊 表紙題字／川平永介 とびら
写真／岩田邦勝 もくじカット／持田郁子 本文カッ
ト／佐藤祝子 本文写真／「広島・長崎原子爆弾の記
録」（子どもたちに世界に／被爆の記録を贈る会）より



碑にこの記録を捧げる

相 川 弘

あの一瞬、一九四五年八月六日九日、広島・長崎に世界初めての原子爆弾（ピカドンと言われていた）が投下され、人間自らの手で人類の歴史に拭うことのできぬ汚点をとどめた。

強烈な熱光線は死の灰となり、放射能の渦の中、すべての人間、生物の一切を殺傷し、地上の形体物を見る影もなく粉碎、相次ぐ火災は全市を焼野ヶ原にし、見えるものは唯地平線のみとなった。

あれから三十七年、被爆者は、生きるためにも社会的に大きな影響を受け、これと闘い続けてきた。そのたたかいの中で力つき、悲惨と残酷のみを残して亡くなった人々も年毎に増えている。二世三世までその根は連なり、住む家もなく、働くところもなく、苦難な生活が長く続いた。

確かに人間社会のことは、時と共に風化の傾向が覗かれた。だから過ちを繰り返すことも可能なのであろう。しかし、被爆者は自からの人生に宿命的なものを持っている。世界唯一の被爆国民として、

被爆体験を生かし続ける運動にすすんで参加するのは、それが世界平和に寄与する重要な使命を秘めていることを発見したからである。

被爆者は、一様にこれら根元的な生のあり方を担っているのです、生きることは、死をはっきり見つめ、死と対決することによって、各人それぞれの生きるセオリー（理論）を見つけることだと思っている。

（江戸川原爆犠牲者追悼碑の会代表幹事）
親江会会長・東友会常任理事

筆者は広島生まれ。広島県船舶木材株式会社勤務。爆心地より一・三キロ地点で被災。主に頭、喉元に無数のガラス破片をかぶり、特に喉元の十八個の厚ガラス摘出に軍医の直接治療を得たが、数日後、顔は大きく腫れあがる。大田川のとりに死の準備一切完了後死線を越え、助かって今日にいたる。被爆当時の海軍監督官と若き部下と最終打ち合わせを最後にそれぞれ職場につき、以来ついに二人とも還らぬ人となる。噫。

放射能被爆者の回想

浄園満成（長崎）

とにかく、妻子の遺骨だけは拾っておこうと思い、海軍を除隊すると早々に、その疎開先の西山町に向ったのは、被爆してもう十日も経つ頃であったと思う。北方から西に向う列車にとび乗ってはみたが、混雑した満員列車は、三間坂のトンネルを今にも止まるかと思うぐらい喘ぎながら登っていく。車中では機関車の吐き出す熱い煤煙と汗の臭気で息のつまるほどの思いである。

大村湾をまわり切って山峡を抜けると、もう爆心地浦上である。全く想像を絶する世界の展開であった。列車は浦上のご真中を通って終点長崎駅に着くのだが、見る限り、緑の樹木は一本も残ってはいない。崩れた瓦礫の間に、飴のように曲がった赤錆びた鉄骨の無惨な姿だけが眼にうつる。まだ夕刻には間があるのに人影はまばらである。

浦上は長崎港のどん詰まりから更に奥まったところに、三方を低い山々に囲まれた盆地の中にあるので、爆発時点での中心地域では、一平方メートル当たり七万〜十万トンの圧力だったという。周囲の山々は地肌がまる見えで、焼け残ったわずかの死木がマッチ棒のように突立っているだけ。これはまさに死の街だ。終点のブラットホームに降りると異臭が鼻につき、白衣の人もいたが、黒ずんで引き裂かれた着衣の間から痛々しく焼けた皮膚をのぞかせる人達の群があった。声を出さず、ただ黙ったまま、壊れかけたホームの柵にもたれてうずくまっていた。持ってきたわずかの軍用医療品の中から、仁丹や



長崎・浦上天主堂（林 重雄）

包帯などをその膝の上にそっと載せると、崩れかけた顔をあげて謝意を示してくれようとするのであろうか。まだ意識は残っている人達である。動員されて被爆し、終点にいれば、だれか肉親が来てくれるかもしれないと、長い時間じっと苦しさに耐え、待ち続けている人達の姿であらう。

私も声もなく廃虚の街を通って瓦礫の坂道を登りつめ、荒れ果てた西山の家にたどりつき、そこで生きている妻子と出合おうなどとは、実のところ思ってもいなかったのである。

今、反核と軍縮の叫びは、民衆の巨大な声となつて世界を駆け巡っている。その響きよ、絶ゆることなく天まで届け。

いまなお、語れないことが

銀 林 美恵子 (広島)

二、三日前、大学生の息子が足が痛いといって病院に行った。「きつと、なんでもないわよ」と

いいながら、内心私はいいような不安を覚えた。この子は三歳のときも、突然足が痛いといい出し、歩けなくなって二、三週間も病院に通うということがあった。あのときも、私は、不安でいても立ってもいられなかった。

「放射能のせいでは？」この、言葉にならない不安が胸の中に広がる。そうでなければ良いが、と祈りたい気持ちになる。幸い、息子は翌日はもうなんともないとかで、元気にテニスをやっていた。

ああ、これで死ぬんだ

私が被爆したのは、この息子より三歳若い十七歳のとき、高校二年の娘と同年のころだ。

その年、広島女子高等師範学校に入学した私は、和歌山の実家を離れ、寮に入った。戦時中のことで入学式がおくれ、七月二十日に開校されたばかりであった。

東京から、大阪から、静岡からと、各地から集

まった生徒たちは、戦時中の暗い時代、空腹をか
かえながらであったが、乙女らしい夢を胸に抱い
て勉強に励んでいた。そのささやかな幸せは二週
間ほどで終わった。

朝礼を終え、二階の教室に集まったとき、ピカ
ッと明るい光が窓からさし込み、次の瞬間、私は
深いところへひきずり込まれていくのを感じてい
た。「ああ、これで死ぬんだな」と、思いながら
郷里の母のことを考えていた。

気がついてみると、二階がくずれ落ちて私たち
は階下に落ちこみ、建物の下じきになっていた。
血みどろになった先生に助けられて私は必死の思
いではい出した。学校のうらの川の方へと私たち
は逃げた。女高師の友だちらしい少女たちが同じ
方向にむかって歩いていたが、だれがだれか見分
けがつかない。顔にやけどをおった人、血だらけ
になった人、衣服がビリビリにやぶけた人。私も
打ばくで片目と片ほおがはれ、右目をやっとなけ
ていられる状態だった。足にもけがをしており、

痛くてとうとう歩けなくなってしまった。同級の
長谷川さんは、衣服がやぶけ、背中から血をふき
出していたが、歩けなくなった私にずっとついて
励ましてくれた。

戦争の傷あとがまだ

その後、傷も治り、教職につき、私は結婚し二
児をもうけたが、私の心の中の不安が消えたこと
はない。子どもが熱を出せば不安になり、足が痛
いと言えば心がふるえる。

子どもたちには小さいころから私の被爆体験を
話してきたが、「もしかしたら、あなたたちの体
にも影響があるかもしれない」とは、いまでもい
うことができない。私が一番おそれていることを、
私は口に出して子どもたちという勇気がない。

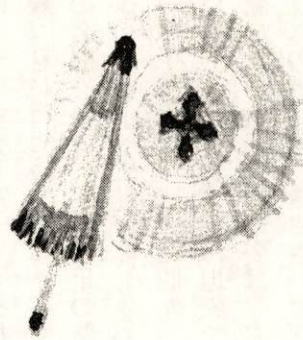
私の命の恩人の長谷川さんは、広島のことでは結
婚話が破談になって、以来独身でとおしている。
私の中でも長谷川さんの中でも、戦争はまだ終わ
っていない。戦争の傷あとが生々しく残って、ひ

よっとしたはず
みに、その傷あ
とが口をあけそ
うになる。

私はいま、高
校で数学を教え
ているが、年に
一度か二度は生
徒たちに広島の

ことを話す。あのころ、私たちは何も知らず、だ
まされて戦争に突入していった。子どもたちには
“だまされない人間”になってもらいたいと思う
から、私は話さずにはいられなくなるのだ。子ど
もたちがほんとうに平和な時代を迎えるためにも
私は生き証人として、被爆の体験、戦争の体験を
伝えていかなければと思っている。

（「女性のひろば」79年8月号）



原爆犠牲者追悼碑「建立のことは」

一九四五年八月六日・九日、広島と長崎に原爆が
投下され、一瞬にして数十万人の生命が消えました。
炎天下、水を求めながら亡くなった人たちに、ど
うぞ、あなたの手で一ぱいの清水をたむけてくだ
さい。

この碑の建立にあたっては、「原爆の図」の作者
丸木位里・俊夫妻が絵筆をとり、江戸川在住の被爆
者二百余名と区民がノミをふるい、多くの人の協力
がありました。

原爆^{ビカ}は人が落とさなければ
落ちてきません

この碑によせる人々の心が
平和の礎となることを念じて

一九八一年七月二六日

江戸川区に原爆犠牲者

追悼碑を建立する会

「水を供えてください」

……姉の最期のことば

堤 久吉（長崎）

今年もまた忘れられない八月九日がやってまいります。私が長崎で被爆したのは九歳の時でした。私は怪我もなかったのですが、姉が爆心地に勤務しておりましたので、その日から姉を探しに出ました。あの時の体験はとも口では言い表わしきれません。

やけただれた体、水を求めて川へとび込む人、目も鼻もわからないほどやけどをした子どもを抱いて助けを求める母親。私にはどうすることもできませんでした。姉の名前を呼びながら、足の踏み場もないほどの死体の中を、一生懸命探しまわりました。しかし、その甲斐もなく、一週間たっても見つからず、家に帰ったその夜、姉は担架で運ばれてきました。驚いたことに、姉の姿は、右の耳から左の耳へガラスの破片がつきささったま

ま、頭の毛は燃えてなくなり、着物はビリビリに破れ、やけどで全身が火ぶくれ、目も鼻もどこにあるかわからないほどでした。

幼い私は、「姉ちゃんはどうしてこんなことになったのか。姉ちゃん死なないで」と、子どもなりに一生懸命祈りました。その甲斐もなく、翌日、「もう助からないから水を飲ましてほしい。私が死んだら、水だけはかかさず供えてくれ。お父さん、お母さんは大切に」と言い残して、十八歳の短い生涯を終えました。その時のことは、私の胸にやきついて一生忘れないでしょう。

あれから三十五年経ち、いま自分の子とその頃の私の年になりました。時々、あのころの話聞かせてい



長崎・母と子（部分）（山端庸介）

ますが、あんな残酷な体験は、私たちだけでたくさんです。皆様、こんな不幸なことが二度とくり返されないように、日本政府へ、世界へ、訴え続けましょう。私たちは国会の地元に住んでいます。全国の被爆者の代表として、援護法制定、核兵器禁止のために、ともにがんばっていきましょうではありませんか。

(親江会だより 54・7・25)

鉄の棒ねじが左手に

佐々木 玲 子 (広島)

忘れようとしても決して忘れることのできない八月六日、あの恐しい原爆が広島に投下された日です。原爆が落とされる半年位前は、広島も空襲が激しさを増し、比治山に近かったせいかな真夜中空襲になると家族でこの山に避難したこともあり、空襲が解除になって山を下り家に着くと又空襲になったり、布団の中に靴をはいたまま、防空頭巾を肩にかけ、かやの中に入った記憶もあり

ます。

六日、この日は登校日ではなく、作業に行く日だったのです。着いてすぐ「ピカッ」——その、今まで見た事もない真黒、赤、黄、無数の原色の閃光が目飛びこんできたのです。そして何秒何分たったことでしょう。気がつく建物の下敷きになり、まるで逆立ちしたような形で、左腕は大きな柱の下敷きになって手を抜くことができません。あちからもこっちからも、「おかあちゃん」「おかあさん」「先生ー助けてー」と悲鳴が聞こえます。泣き叫ぶ声がだんだん細く、少なくななり、私も必死で外に出ようと、もがき、叫び、わめき、声もかれてしまい、この左手さえ動けば……その時、上の方で人声がしました。「この下に人がいるぞ、」地獄で仏に逢うとはこういうときのことでしょうか。木材や壁をとり除き、この大きな柱に棒をテコにして、一二三で私の左手を抜き出すことに成功しました。この時のうれしさは一生忘れることはできません。気がつくと、この



長崎・母と子（山端庸介）

左手には鉄の棒ねじが貫通していたのです。

一体、友達はどうしたのでしょうか。すると庭石の上から先生が、

「君がもう最後だ。早く逃げなさい。火の海になるから。」

見ると先生は血だらけで、裸でした。

石の下で、下半身が埋まり、生きた人が焼けています。道路に出ると、電柱が倒れ家がみな燃えています。十五、六の少年が血と泥のついたひもみたいなものをぶらさげて、ひょろひょろ裸で歩いているので、見るとそれは腸が出ているのです。

また、指先にぼろ布をぶらさげている人がたくさんいましたが、皮膚が破けて指先に集まったのです。焼けただれた鉄橋を裸足で渡り、燃えさかる建物の前を走り去ったこと。ゆでだこのように真赤にただれた人が、自転車前後に子供を乗せ、そのまま溝につゝこんで亡くなっています。また水が飲みたくて防火用水の中に顔をつっこみ亡くなっています。それらは数限りなくどこまで行っても死の世界が永遠と続くほんとうに悲惨な光景でした。何日かたち、その門の前には黒こげになったたくさんの方々が並べられていて、わが子を背負って帰られたお母さんの話を聞く時、胸はつまります。

今も私の左手の肘には、その当時を裏づける貫通の跡があり、胸にもガラスの破片の跡が無数に刻まれ、当時の事を思い出すとぞっといたします。子どもたちの未来に、広島そして長崎を二度と再び繰り返すようなことが決してあってはなりません。

（親江会だより 57・3・1）

「水をください」

久保 享（長崎）

一九四五年八月九日。

その日も朝から暑い日だった。私は上半身裸で下は半ズボンの姿で昼食のしたくのため七輪に火を起こそうとしていた。何千本ものマグネシウムを燃やしたような白閃を北の空に感じた。私は本能的に家の中心部に逃げこみ……数秒後に、ゴー……ゴー……と天地が裂けたかと思うばかりの凄まじい音を聞いたのである。

何時間経過したろうか……いや、実際には数十分だろうか……爆風はおさまり無気味な静寂をとりのどしていた。気がつくと、天井が落ち、柱は倒れ、はりが斜めに目前をさえぎり、身体を自由を失っていたが……やっこの思いで障害物の板片や材木を押しつけ屋外に這い出していた。裸足である。防空壕の中は暗く、奥には水がたまっている。

て、女の人の呻き声が聞こえる。死んでもよい、死ぬなら明るい所で死にたい、そう思っただけの外に出た。しばらくすると、爆心地に近い写真屋付近から火の手が上がり、除々に燃え広がりはじめた。私たちの家が燃えている。だがだれもどうしようもない。ただ放心したように眺めているだけである。

数時間後、近くの工場から帰った父と逢うことができ、無事を喜び合ったが、父の隣に避難した人は放射能光線を浴び重傷を負ったそうである。家が焼け、寝る所に困ったので、とりあえず一夜の宿を愛宕町の親類のところに行くことにした。店子のHさんも子連れでいっしょである。稲佐橋を渡り、途中御蔵町付近では道路の脇に大勢の人が坐りこんでいた。浦上の方より逃げてきた人であろう、唇は張れ上がり、半裸の上半身は着ていたブラウスの模様がそのまま肌に焼きつき、刺青のようなヤケドをしていた。髪の毛は燃えちぢれて、一センチ位になっている。顔も黒人のように

真黒である。「水をください」「水はないですか」

力のないつぶやくような声、私たちのだれしも数時間水を飲んでいないのである。ああ水が欲しい――ほくもそう思った。

夕闇の中で県庁が燃えている。焼け焦げた人間の死体に混じって牛や馬の死体も臭気を放つ。思案橋の山手にある愛宕町にたどり着いたのは八時過ぎではなかったろうか。井戸の水をもらい、身体を洗おうとして気が付くと女物の下駄をはいていた。胸や手には木の端片（マッチ棒のような木片）が数十本も突き刺さっていた。

（親江会だより 55・1・25）

新たな平和運動の高まり

米ソ等「大国」の核兵器開発競争が激化し、個別誘導多核弾頭の出現で先制攻撃の可能性さえ生じている。こうした中で昨年からヨーロッパ各地で数十万人の反核集会が開かれ、日本でも核兵器の完全禁止と軍縮を求める平和運動が今高まっている。

地獄の道走る

―追悼碑除幕式での体験談

矢部 キヨ子（広島）

本日は、私たち被爆者のために、このようにりっぱな原爆犠牲者追悼碑を建立していただきましたことに、心からお礼申しあげます。

三十六年前の八月六日の体験談を、というお名指しがありましたので、今日、この追悼碑の前でみなさまとご一緒にもう一度あの日のできごとを目のあたりに思い浮かべてみまして、尊い命を捨てられました方々へのご冥福をお祈りいたしたいと存じます。

私はあの日は女学校から皆実町の専売局に動員されておりました。

「ピカッ」とそれはそれは明るい光でした。専売局中の電気が一ぺんにショートしたのかと思われました。「ブスッ」とにぶい音がして次の瞬間は何かに叩きつけられた感じでした。それからどれ

だけ時間がたったかわかりません。気がついたときはあたりはまっ暗闇でした。人の気配は全くありません。お隣りで私と肩を並べて作業についておられた野村さんはどうなさったのかしら……。私が気を失っている間にみんなの先頭に立って指揮をとっておられるに違いない。急いで逃げなくては一人で火に包まれてしまう。——と手さぐりで歩き出しました。箱がガタガタにちらかっていて一足進むのも容易ではありません。やっと門の近くまで来たとき、薄茶色の闇の中をちらほらと歩く人の姿が見えてきました。誰でもいい、人の後についていこうと思いました。誰かに手をとられ、塀をのぼって外に出ました。

あたりは大分明るくなり、人の顔が見えるようになっていました。ふと、こわれた家のそばで、

「水、水はありませんか」

という声が聞こえました。

「あ、水はここに出ていますよ」

と教えてあげました。その人は夢中で水を飲んで

いました。よく見ますと、それは一人の兵隊さんでした。身体中灰色でした。何の灰をかぶったのかしら。服は着ていません。革のバンドの所々によれよれのものが下がっています。肩から斜めにかけて革ひものところにも何かよじれてたれ下がっています。何気なく見ますと、それは軍服の一部ではなく、皮膚がよじれて下がっているのです。はだかになっている腕のあちこちにも、皮膚がむけてよじれたようになってぶらさがっています。大きな靴、腰のまわりの持ち物等で兵隊さんであることははっきりわかります。屋内で被爆した私は火傷ということを知りませんでした。この兵隊さんは、おそらくあの晴れわたった青空の下で、全身に強い光の直射を受けられたのではないでしょう。か。お水を飲み終わると、まっ赤に焼けただれた目で、力のない足どりでどこかへ歩いていかれました。私の目に今でもはっきりと残っているこの兵隊さんの姿は、被爆後三十分もたっていない時点での全身火傷の人のありさまでした。

お気の毒という一語につきます。

あたりは明るくなり、第二県女の友だち二、三人と会うことができました。人の後について知らない道を東へ東へと走りました。途中で雨にもあいました。お昼近くまで山の中で避難していましたが、後もどりすることにしました。

専売局に着いて見ると人氣はなくガランとしておりました。そして野村さんと二人で使っていた機械の前に立ちました。何ということでしょう。そこには、血の海といたいほどのたくさんの血が、丸く大きくどろどろに広がっておりしました。

「しまった……」私は負傷された野村さんを置いて一人で逃げてしまったのだ。悪かった。ほんとうに申しわけないことをしてしまいました。あんなにいつも優しくしてくださった上級生に、何という薄情なことを……と悔やまれてなりません。二人はほんとうに肩と肩はくっついていたので。いつも並んでおしゃべりをしながら煙草をとっていたのです。後で聞いたお話によります

と、野村さんは頭に大きなガラスのかたまりが当り、昏睡状態のまま四、五日間生き続けられたということです。私に会いたかったのでしょうか。毎日続けて夢を見ていました。お見舞いにも行つてあげられなかったおわびとご冥福を、この席をかり、あらためてお祈りさせていただきたいと思っています。

学校と専売局は広島市の東の端、私の家は西の端にあります。これから市内を横ぎらなくてはなりません。御幸橋を西へ渡ると急に熱風で息が苦しくなってきました。電車が骨だけになって立っていました。「ピカッ」の瞬間市内の電車は火だるまになって燃えたそうです。乗客は誰一人逃げることができなかったと聞かされました。私達は次の橋までの間を夢中で走りました。大通りの両側は燃えてはおりませんが、熱い風がもの凄いいで吹いてきます。これが火事場の大風というのでしょうか。口をおおい、手を取り合って必死で走りました。途中で息をする事もできないくらい

です。やっと橋のたもとまで来ました。そこには、まっ赤な大きな顔をした人達がずらりと坐っています。口々に「水をください」「水をください」とたのんでいます。それは人の顔ではありません。赤鬼といたいくらいです。こわくて近よれない



広島・御幸橋西詰（松重美人）

ほどです。水を汲んで上げたいのは山々なのですが、橋のたもとから橋の上まで両側にずらりと並んで大変な人数です。どうすることもできません。みんなもう歩けない人ばかりです。全裸の女性もおられました。殆んどの人があまり着ていないようでした。光線で焼けたのではないでしょう。か。心の内で「ゴメンナサイ」何も負傷していないのがすまない気持ちで逃げるように通りすぎました。地獄の道を走ってのような思いでいくつかの橋を渡りました。己斐から阿品の避難場所まで暗い夜道を歩き続けました。左手には広島空がまっ赤に燃え続けております。あの中には逃げ遅れて生きたまゝ焼かれている人もたくさんいらっしゃる。ときかされました。

私達人類はこの悲劇を二度と繰り返したくありません。そのためにも、今日みなさまのご協力により催してくださった、この追悼会は、大変意義のあるものと考えます。そしていつまでも現在の平和が維持されますよう、心からお祈りいたします。

巨大な火の玉の下で

―追悼碑除幕式での体験談

中山 鈴子（長崎）

昭和二十年八月九日、私は、現在の長崎市大浜町になっております大浦に住んでいました。当時十歳……。その日は、父に「家から遠くへ行っただけじゃない」と言われていました。

八月に入ってからだったと思いますが、長崎市内に多数のビラがばらまかれていました。ビラには「日本よい国神の国八月八日は灰の国」と書かれていました。父はそれを見て、「八日と書いてあるが、八日は大丈夫、九日は気をつけなければならぬ」と家族に話しました。当時、父は三菱造船所へ勤務しておりましたが、母のとめるのも聞かず、八日まで出勤して行きました。

九日当日は会社を休んで家にいたのです。その日は晴天で、夏の陽ざしは強く、水遊びするため叔母の家の前にある井戸で、妹、従妹四人で遊ん

でいました。その時私は、水を汲み上げるため立っていました。ピカッとしたので振り向くと、稲佐山に、太陽を何十倍もしたガラガラする火の玉が、半分浮かんでいました。ほんとうに太陽みたいでしたので、私は「お日様が落ちた！」と思わず言っただけで、妹たちの方を見たのですが、瞬間真っ暗になって何も見えなかったのです。

やっと見えるようになりまして、家の中へ入ろうとしたのですが、爆風がきてかわらが落ちる、壁土はまい上がるで、すぐには入れなかったのです。今でも不思議に思うのですが、台風の風より弱かったと思いますが、すごいエネルギーだったのです。かわらは落ちる、ふすまはとぶ、壁土はまい上がる……叔母をみると、必死につかまっていた。その時私の身体は真っ黒になっていたらしいのです。水で洗うと赤くなっていました。ビリビリと痛みを感じましたが、恐しくってどうすればいいかわからなかったのです。

叔母たちは家の中からとび出てきて、「今のは

何だったのだろう」と口々に言っていました。今見た火の玉のことを話しているうちに、きのこ雲が、稲佐山に湧き上がっていました。怖さで、自宅まで行って父を呼んだら、父は奥のふとん入れの所で、十か月になったばかりの弟を抱いて伏せていました。玄関の所に、どこから飛んできたのかトタンがつきささっていました。そこには、父がいま抱えている弟が眠っていたはずです。父



は恐怖に顔をひきつけていました。

ピカッと光線がきたので、私たちの名前を呼んだのだそうです。返事がないので玄関を見ると、弟が眠っていた。すぐ抱き上げた。瞬間、トタンがつきささったらしいのです。「危機一髪だった。一足遅れたらこの子の体に……この子は死んでいただろう」と話していました。

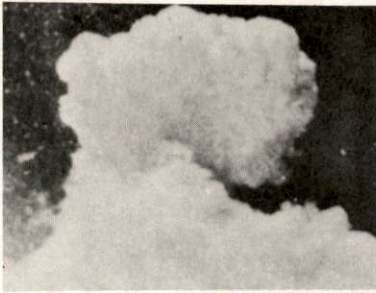
母が外出先から帰ってまいりました。干していたふとんが、表面黒くこげていて、あらためておどろいていました。お昼過ぎから、稲佐山を登って逃げてくる人には、衣類が焼けていたり、皮膚もただれて、身体一つで通って行きました。そして口々に「浦上はもう地獄だ」と言っていました。翌朝、父は出勤していききました。帰って参りまして、「今日は死体のかたづけに行った。死人を車で運んで一か所に集め、重油をかけて焼いた」と話していました。

二、三日いたしまして、私たちのいた所より高い山の中腹で野良仕事をしていた母の知人は、や

はり大きな丸い火の玉を見たのだそうです。見た瞬間、目が見えなくなり、逃げるのに這ってまわるほど、強い光線にやられたらしいのです。その方は、二、三年も経っていたでしょうか、目がくさってきたとかで、治療の手だてもなく、痛み苦しんで、自宅で亡くられました。

今でも当時のことは鮮明に思い出されます。もう父母も亡くなっております。私も江戸川に住みついて十五年にもなりますが、なかなか長崎の方へは帰れません。今日ここにりっぱな記念碑を建て

ていただき、あらためて「核」のおそろしさを訴え、苦しみながら亡くなられていった方々の冥福を祈る気持ちです。永遠に平和で幸せな世の中でありますよう、つたない私の体験を終わらせていただきます。



長崎・原子雲（塩月正雄）

被爆者援護法制定をめざして

原爆犠牲者に対し国家補償をおこなうという理念のもとに立案されたもので、この実現こそ「未来の平和の証」と言われている。この制定をめざし、被団協では過去二十数年、国会請願、被爆者の全国行脚、厚生省前のすわり込み、二十万署名の国民運動、原爆を裁く国民法廷等々、多様で幅広い運動を続けてきている。今では全野党共同提案として国会に提出されるようになったが、自民党の反対で未だに実現されていない。

被爆者援護法案のための要求骨子（要旨）

- 一、立法の趣旨 原爆被害への国の補償責任をみるとめ、ふたたび被爆者をつくらぬ決意を趣旨とする（前文・目的）
- 二、要求事項
- 1 国の責任による健康管理と治療
 - 2 被爆者年金（被爆者の身体上、生活上の困難と精神上的の苦痛への償い）
 - 3 遺族年金（遺族の経済上、生活上の負担と精神的苦痛への償い）
 - 4 障害年金
 - 5 療養手当
 - 6 生活手当
 - 7 介護手当
 - 8 弔慰金
 - 9 葬祭料
- 他全十五項目

曉第一六七二〇部隊の被爆

本田 孝 夫（広島）

一、召 集

昭和二十年三月末、最初でこれきりになった、一歳繰り上がりの満十九歳の徴兵検査を受けました。戦中派の男子にとって徴兵は成人への一つの節目でありました。

「四ツキ二四ヒ、ヒロシマ、アカツキダイ一六七二〇ブタイニュウタイセヨ」の電報を受けとったのは何日であったか記憶にない。これで家に残るのは父母と弟の三名となりました。

いよいよ出発、四月二十二日、隣組や知人の方の歓迎を受け、鎮守に参拝、「本田孝夫元気でいきます」とご挨拶。帰らぬ覚悟ですから「行つて来ます」とは述べませんでした。東京駅までは弟他数名の見送りを受けました。

四月二十五日、迫り来る百五日後の運命も知らずに、広島市皆実町、船舶通信兵補充隊、曉第一六七一〇部隊に召集されました。満十八歳七カ月二十八日でした。この日はけたたましい警報サイレンが鳴って目をさしました。

規律ある軍隊生活に身を投じたこと、このことは当時の青年として、国家に対する当然の義務と教育されていたことであり、ごく少数の者を除けば何一つ不平をもらす者はいなかったのです。それはまた、死を予期し、あるいは死を決したものであり、仲間となった戦友との間には、どんな女性を妻に持ち、生まれた子供をどう育てるかなどともかく未来を語り合うことはなかったし、考える余裕もありませんでした。

「七月十五日、天下の候補生として多きが中に選ばれ、希望に胸ふくらませつつ来隊せし……」と教官が述べた如く、各中隊の合格者の幹部候補生隊における集合教育が開始されました。この日からの教育は初年兵であった二カ月余にくらべ、

勝るとも劣らない苛烈なものでした。

八月五日の夜は、空襲警報の度に警報ラップでたたき起こされ、まんじりともできませんでした。このところ毎夜のことではありましたが。

二、八月六日

八月六日、月曜日。今日の一日も時間の変更のない通常通りの日課で軍務が始まりました。午前六時、起床ラップに起こされ、点呼、飯上げ、食事とあわただしいひとときを過ごしていました。

昨夜は空襲警報のつど起こされたこと、二度目の警報解除が六日の深更にわたっていたこともあり、候補生は疲れておることだろうと、教官らの計らいにより正午までの就寝許可ができました。

私は窓際すぐのベッドにもぐりこみ、くつきりと晴れわたった青空を眺めながら、戦友A候補生につぶやきました。

「今日も暑い一日が始まるな」

午前七時九分に発令された警戒警報は、三十一

分解除ということでサイレンが鳴りわたりましたが、聞きなれたB29の爆音は相も変わらず天空から響きわたっていました。

うとうととして眠りにつけるかなと思ったのは時間にして半刻ほどであつたろうか。全く突如として、一瞬強い明るさを感じた。オレンジ色に近い黄色の光線が、左後方から足元に向けて内務班にさしこんだ、とほとんど同時に直撃弾を受けたような「ドカン」という衝撃音が耳に入った。だれかが、

「爆弾、落下！」

と叫んだ。私は薬布団にみの虫のようにくるまっていたが、どのような動作をしたか記憶にない。おそらくは反射的にはね起きて「伏せ」の姿勢でもしたのだろうか。左足甲にガラスによる裂傷を負っていた他には大きな負傷は見当らなかった。寸刻、兵舎内は砂塵につつまれた感じとなった。

長くて短い時間、おそらく一分か二分であつたろう、気がついて周囲を見まわすと、兵舎は側壁

が吹き飛ばされて天空をのぞかせ、前側上段ベッドはたたき落とされ、ガラス戸は一瞬のうちに飛散しており、枕元にさげた剣はもちろんのこと、銃架に整然と並んでいた銃は一挺も見当たらないです。兵舎内は蜂の巣をつついたような割れるような騒ぎとなりました。「総員退避」の声も聞こえてくるし、今や一刻の猶余もできない、この上何が起るかわからぬと直感して、舎外の防空壕に脱出しました。

数刻の間状況を眺めているうちに、ある程度落着きをとりのどしてきたのでしょうか、私をふくめ各候補生は、今脱出てきたばかりの内務班に入って、飛散した銃、剣等、員数だけを持ち出し、あとは貴重品を含めた当座の手回り品だけを手にして、ふたたび舎外の人となりました。全員点呼をした後に、比治山に退避することになりました。私の前側の班にいた何名かの候補生は膚の露出していたところが赤くなり、「あつい、あつい」と言っておりまして。私は前述の通り、左足甲に



広島・産業奨励館（松本栄一）

ガラス裂傷、その後しばらくは軍靴を足にすることはできませんでした。

比治山に向うには、部隊裏門を出て行くのですが、裏門の外側は道路になっており、市の中心部方向から、被災した相当数の市民が宇品方面に向い避難して行くではありませんか。察するところ市の中心部に相当大量の爆弾が落とされたのではないかと思いました。

二、三歳の血だらけになった裸の子供を大八車に乗せて避難してきた父親の姿が第一印象として脳裏にやきつきました。比治山の上には大勢の一般市民も逃げこんできておりました。十四、五歳の、私の弟位の少年が全身黒こげとなり、腰かけたまま、うつろな眼ざしで、ふくれあがった口元から、

「ヘイタイサン、オミズチョウダイ」

と何度か切なくせがまれました。これが脳裏に残る第二印象となりました。これらが全く印象的で生涯を通じて忘れることのできない光景です。

特に、この少年を見た一瞬、東京の家のことが頭の中をよぎりました。よく私といっしょだった弟、B 29の夜間空襲を眺めていた弟、あいつに早くこのことを知らせなければ、この少年と同じになっちまうぞと。しかし、この思いは東京にはとどかぬし、いつ連絡ができるやらわからない……。

「火傷した者に水を飲ませてはいけない、すぐ死ぬから」ということは何度か耳にしていたので心を鬼にして？少年には水を与えませんでしたがいまだに心に残ることです。後々知った状況から判断すると、おそらくこの少年は数日を待たずして死んだことであろう、それならば水を与えてやってもよかったですではないか。心に残ったとはいえ、どんな攻撃を受けて、はっきりした被害状況もわからないのに水筒の水を分かち与えたら、自分自身が枯渇するのではないか、という判断が心の奥に多分にあったことは確かです。

退避してきたこの比治山のかげ西北方の空には、今まで見たこともない巨大な入道雲（今日いうき

のこ雲）がニヨキニヨキと天空にひろがるのを見ました。いわゆる「黒い雨」が降ったのはこの時間（推定九時頃か）ではないかと思っています。

私たちの起居する兵舎は、大破といかぬまでも相当の破壊を受けました。中央階段はもはや満足な昇降はできず、他の小隊では倒壊した材木の下敷きになって、ある候補生が戦死したということでした。また、集合教育が終了した一個小隊は、この朝、部隊長に申告のため本部前宮庭に整列していた時に、全員が直撃を受け、重火傷を負ったことは私の最も身近に見た隊内の痛ましい被害でありました。後にこの小隊の銃を見ると、把手していた指跡がはっきりと本部に残されておりました。この兵隊に対しての手当ては、満足な医薬品もなく、銃手入れに使用するスピンドル油を傷口に塗布するだけしか方法がありませんでした。この塗布した油が気化して天ぷらを揚げるときのような異様な臭気となり、あたりにただよっており

夕刻、集合の命が下りました。私は足の傷も忘れ、この隊列に加わりました。負傷兵を宇品の船舶練習部に搬送するための集合だったのです。長い隊列であったことを記憶するだけで何名の負傷兵を搬送したかさだかではありません。陽も落ちかかり、うす暗くなりつつあった街の中を行くと市民はこの隊列を眺めて

「兵隊さんがこんなに大勢怪我したのでは戦争するのが大変だ」

と涙をまじえつつ悲痛な話をするのが耳に入りました。しかし長い隊列は黙々と重い足を引きずり一路宇品へと歩をすすめていきました。到着した船舶練習部の講堂内には、先着の大勢の負傷者が兵隊、市民の区別なく、俵でも転げたようにいるではありませんか。搬送した負傷兵を次々に空いている場所に寝かせていきました。

三、八月七日

翌八月七日の朝は宇品で迎えました。練習部残

留を命ぜられた者の任務は、負傷兵の看護並びに医務室までの搬送です。数知れぬ負傷者の横たえられている通信講堂が明るくなってきました。兵隊は軍服らしきものを身につけているのでわかりますが、傷害度のひどい者については、自分の隊の者であるかの判別に苦労しました。市民は服装を見てそれと判別はできません。

私は用便のため厠に行つて驚きました。扉を開けたところ、やっとここにたどりついたのでしょう、のけぞつて倒れ、そのまま息絶えていた兵隊がいたのです。もはや手の下しようがなかったのもそのままにしておきました。また、骨折の痛みでしようか、苦しんでいた兵隊に添木を当てなおして三角巾を巻いてやったのですが、苦しさは癒えない、他に負傷しているとは見うけなかったのに、問いただしても苦しむのみであり、これには困惑しました。他に血だらけの、おそらく爆風で皮膚をはがされて血だらけに見えた負傷者、息をひきとった肉親の前で泣き伏す家族、そつと死者

の髪を切り持ち帰る人……後日、死骸をひきとり自ら荼毗に付したことでしよう。

負傷兵を医務室に搬送する。治療に当る軍医は「何故か原因不明の死者が多い」と言っていました。今日でこそ原子爆弾放射能による被爆死、又はその後遺症に悩まされていることがわかつていても、被爆した翌日には何か判然としない大爆撃を受けたと思つていたのだから、軍医のいふかつていたのも当然であつたのかもしれない。ここでは負傷者の救護は満足にできず、ただ医務室に搬送するだけ。死者に掌を合わせることもしなかった私、いま考えてみると懺悔せねばならぬところがあつたと思います。

深夜になり、本隊復帰ということになりました。まだ火のくすぶる市内を通過して帰路につくことを決めました。夜とはいえ、燃え残りの火のために明るい。街の中は、焼け残つたビルを除けば何一つ建物は見当らず、正に一望千里、ほんとうにどうして一日や二日のうちに広島市がこんなになつ

てしまったのか、驚愕するのみでした。

四、足の傷

私自身の足の傷はどうなっていたか。医務室に再三行ったが軍医はおらずがらんだう、医薬品は何も見当らず、従って治療してもらったことは一度もありません。軍足の上のにじみ出た膿（うみ）を紙でふきとるしか方法はなく、そのうちに蠅（うば）がここにとまる、払えど追えど逃げてはまたとまる、最後には気力もなくなり、じっと見つめたままでいた時もありました。傷口から蛆（うし）の這い出ていた死体や重傷者のいたこともうなづけます。この足の傷は年内に治療したのだが、その跡が残り、二、三年皮がむけてくる状態がつづいていました。

被爆してまもなく、私だけでなく仲間の兵隊はみなそうでしたが、下痢症状に悩まされていました。まあ一種の原爆病であつたらしく、東京に帰ってからもしばらくの間続いていました。元の状態に戻ったのは、放射能のないきれいなところで

生活したためか、または軽症のためかはさだかありません。

「七十五年間、広島には人も住めない。雀も蟬も、そしてすべての草木は枯死する」

といつしか流布されましたが、しかし全ての生命は強かった。兵舎付近に雀が餌を求め、蟬が毎日の暑さを告げることく鳴くようになったのは何日ごろからであつたでしょうか。

後日の戦友会で、八月十五日前後の話が出ました。ある者は死体処理と焼却に、一隊は市内橋梁の警備に、被災地復旧のための使役にと出かけていました。私は隊内に残留していたため、このような経験を持たず、また記憶もありません。一度風呂代わりに川に水浴びに行ったことがありましたが、この日も何日か忘れてしまいました。話に聞いた死体などはすでにありませんでした。この頃には投下された爆弾は「原子爆弾」であるということが知らされたように思います。

学友の死を背に

田 川 時 彦 (広島)

地を裂くような閃光の瞬間、垣谷は、

「室長さんっ」

と、わたしを呼びながら部屋の出口に走ったと、生き残りの学生が報告をしてくれた。

当時、垣谷もわたしも、広島師範学校の予科寮生で、机も寝台もとなりあわせていた。わたしはたまたま八月六日の朝、郊外の海田市に作業動員にかりだされて一命をとりとめ、一学年下の垣谷は、寮に残されたためにふきとばされた。

出口とはまるで違った位置の壁土の下から、何かを求めつかもうとするかのように、灰色の右手がのぞいているのを見つけたのは、三日目も夕刻になってからだだった。顔面は三倍にもふくれあがって、着衣によって彼だと判断するほどの変わりようだった。

垣谷が四月に入学し入寮してきたとき、年老いた彼の父親は、

「気の弱い、要領の悪いやつですが、室長さんにあずけますので、どうかよろしゅうに。」

とまがりかけた腰をいっそう低くして備後赤坂のいなかへ帰って行った。

他の死没学生と共に、ダビにふした垣谷の骨を受けとりにみえたのは、すでに現場の教師をしている叔父にあたる人だった。病弱の老父は、息子の死を知らされた打撃で床に伏し、すぐに来れる状態ではないとのことだった。

その後、垣谷の父がわたしを訪れてみえたのは、その年、焼け跡の上を荒れ狂った台風もすぎ、わたしも、放射能の急性症状



広島・教師と子どもの碑
(黒川万千代)

からやっとたちなおった秋も半ばになってのことだった。衰弱しきった老父の悲しいまなこで見上げられ、「室長さんは、生きておられてよかったですね。」とあいさつされた時、わたしは身の置場に苦しんだ。生き残った自分が醜いものにさえ思えた。

断末魔のきわに、わたしを呼んだ垣谷の声と、息子を原爆に奪われた老父のまなざしとをいつも背に感じながら、今日も、わたしは被爆者運動に足を運ぶ。

きれいな青空だった

梅 沢 武 次（広島）

あの一瞬の閃光が走ったとき、私は軍人として広島にいた。場所は広島市宇品町、陸軍船舶練習部教導連隊で陸軍兵長だった。又、ラッパ長として衛兵所勤務が多かったので、私を知っている兵隊も多かった。南は九州から北は東北、北海道ま

で、わが隊には数多い出身地の軍人がいた。

私はあの時何を見たか。瞬間的な惨事は永遠にぬぐいさることはできない。昭和二十年八月六日午前八時十五分、その数十分前の現実を私は見ていた。暑い真夏の朝の太陽がガラガラと輝き、雲一つないきれいな青空が大きく広がっていた。その時、B 29の爆音が聞こえてきて、青空を見上げると、上空約一万メートル位の所に落下傘がふわりふわりと落ちてくるように見えた。何だろうと思いつながら見ていたB 29が、実は原爆を落として逃げて行くとは思ってもいなかった。スピードをあげているので爆音が大きくなった。落下傘が気になる。なかなか落ちてこない。何だろう。その間数分。私の目の中に閃光が走った。熱い大きな爆発音が聞こえるとともに、ものすごい爆風が私の身体を地面にたたきつけた。熱。痛い。私はとっさに物陰に逃れた。

数分してあたりを見渡すと、部隊の塀がない。兵舎の窓の戸がみんなきれいに吹き飛んでいる。

近所の家々がない。倒れている。部隊の営庭がきれいに掃除されたようにほうきのすじ目が通っている。ごみがない。すべてが爆風で吹きとんだのだ。急いで兵舎に帰りかける。ふと見ると広島市の中心街上空が真赤に燃えている。どす黒い、白いような、赤いような、焼けた雲がもくもくと動いている。たいへんなことになったと思い、急いで兵舎に帰ってびっくりした。壁がみんな落ち、防火バケツが全部ひっくり返り、水と土とがまざってどろどろだ。片付けるようにとの命令で、いやいやながら片付け始めると、今度は部隊命令が出た。

「広島市に特殊爆弾落下、死傷及び重傷多数あり。救援活動に各班から二名出動せよ」

私もその一員となり、長以下三十五名、市街の中心部に駆け足で向かった。宇品町を出て御幸橋方面に向かった。負傷者が逃げてくる。焼けただれた身体、真黒な顔、みんな泣いて叫んでいる。残酷な姿だ。私は大声で叫んだ。宇品港方面に逃

げるようにと叫んだ。御幸橋に近くなると重傷者の数が多くなる。動けない人、重傷のためやつのことで逃げる人……まったくこの世のものではない。まるで地獄だ。このあと私は御幸橋を中心に火の中に入り救援活動することになる。また被爆後、私自身が苦しみぬいたのだが、これらのことはまたの機会にゆずりたい。

東友会・被団協

東京都原爆被害者団体協議会（東友会）は、親江会の上部団体であり、その全国組織が日本原水爆被害者団体協議会（被団協）である。被団協の結成は一九五六年であり、四半世紀にわたり援護法の制定をめざして様々な運動を展開してきている。現在、被爆者は東京に約一万人、全国で三十七万人余りが不安な生活を送っている。

▽東友会 港区新橋六一一九―二三

電話（四三一）八一二〇
電話（四三八）一八九七
▽被団協 同右

思い出すままに

林 きくの (広島・故人)

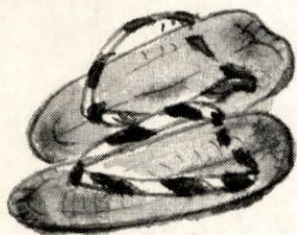
親江会恒例の新年会もお開きになって帰るころには、屋根も道路も真白くなっていた。車窓に吹きつける雪を見ているとき、三十四年前のこの日が鮮やかに蘇ってきた。亡き夫のお通夜だったあの日もほんとうに冷えがきびしく、翌十四日は朝から雪がちらついて、前日にも増して冷えこんだ。

息を引きとった主人の枕もとには、私が三日前から飲物を制限して、貨車に立ち通して遠くまで出かけて買ってきた薬も、半分以上残ったままだった。残された私は、襖のかけから不審な眼ざしでのぞき見ている幼児を加え、一人で三人の子どもを抱えて、生活力もないのに、この先混乱の世の中をどうして生きていけばいいのかと、大きな不安におそわれた。息絶えた夫の前に坐っていても涙も出なかった。

相談する身よりはみんな遠く離れ住む者ばかり、電報でも東京まで四、五日かかる時だった。何もかも自分でやらなければ、頼る人はいないのだと心を定めるのに時間はかからなかった。上の子に半紙に線を引かせた手製の野紙に、閲覧料を払って写してきたわが家の戸籍謄本を、栄養失調からくる視力のおとろえを感じながら、自分で書いて八通作った。

海田の方へ疎開している県庁から始まって、疎開先を調べては、保険会社など毎日出かける日が続いた。時には日の暮れることもあり、瓦礫の暗い道を涙をこぼしながら帰宅したこともあった。

愚明をすませ愛知県の方へ移ったが、疎開者、疎開者と特別の目で見られ、田舎の生活



も平穩ではなかった。どんなに苦しくても十年辛抱しよう、と自身に言いきかせて堪えた。

少しでも多い収入へと職も転々とし、自分の着換えもないほど衣料も売りつくした。泥沼のような切ない日が続いた。

昭和三十三年、市立の老人ホームが建ち、応募も何人かあったが、幸い採用されて老人相手の生活が始まった。一息ついたと思ったとき、次女が原爆症と診断され、それから入院をくり返す十余年の闘病生活が始まった。その娘が八年前に亡くなった時、「私も死にたくなりました」という私に、千葉先生は、「あなたは広島証人ですよ」と言われ、あとは黙って見ておられました。自分にこだわりすぎたことが恥ずかしくなり、以後、この一言が鞭となって私を励ましてくれます。戦争を二度とくり返してはならない、という願いとともに。

(親江会だより 55:1:25)

妻の叫び

高木留男(広島)

「私が一体何をしたというのでしょうか。私は何も悪いことをしていないのに、なぜ私だけがこんなに苦しまなければいけないのでしょうか——」口ぐせのように言っていた妻。そして「一日も早く退院したい。子どもの待つわが家へ帰りたい」と言い続けていた妻だった。血を吐きながらも、はかなき願いを千代紙に託して折り続けた千羽鶴。「この折鶴を千羽折り上げた日が、私が退院する日だ」「手術して直るものなら手術してもらいたい」とも言っていた。

桜の便りも聞かれる頃だった。辛い、苦しい、悲しい思い出ばかりが頭から消えない。東京の空襲で二度も焼け出され、安全の地を求めて逃れたはずの広島で、二度あることは三度あるというか、皮肉というか運命というか、これが運命なら

あまりにも酷すぎる。私はいつも恨んでいる。原爆さえなかったら、もっと親子楽しい生活ができただろうにと。これは被爆した者が抱く、いつわらざる心境だろうと思う。

病状が日を追って悪化していく中で、四十度からの熱が続き咳が出る。医師は風邪だろうぐらいのことで、解熱剤の注射や風邪薬をくれるだけだった。実は血液が肺の中に入り、そのため熱を出したり咳をしていたのだ。

四十三年も三月中旬、ようやく妻も焦り出し「こんな病院にいたんでは、みすみす死ぬのを待っているようなものだ」と言った。私も思い切って他の病院を紹介してくれと医師に言った。三月二十六日墨東病院を紹介してくれた。病院から出してくれた車に荷物を全部積んで行ったけど、一カ月位前から契約しておかないとだめだと情容赦なく断わられた。仕方なく前の病院へ帰り、翌日順天堂医院を紹介され無事入院することができたが、ここが私の妻にとって人生の終着駅になろうとは

思ってもみなかった。

八重桜も散り始める四月二十二日午前五時三十分、ついに不帰の客となった。病院側の申し出により、同じ病院で苦しんでいる人のために解剖させていただきたいとの話に、亡き妻の母や妻の弟と相談の結果、遺体解剖が無駄にならないようにと、これを了承した。その結果は、恐しい造血機能障害をおこしていたとのことだ。それから認定申請書を書きましようかと言われたが、なぜもっと早く造血機能障害を発見できなかったのだろうか。本人が死んでから認定申請を出したところでは何になるのだろうか。認定制度そのものが根本からまちがっている。ただ君のため国のためと日夜を分かたず銃後を守りつづけた者の哀れな最後だった。

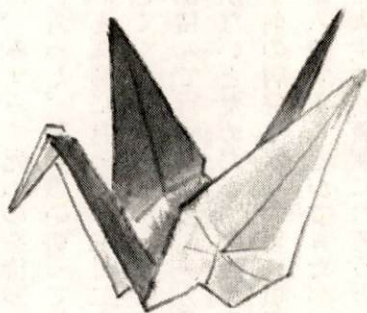
原爆症としての認定申請書を書いてもらうべく再三頼んだが、そのつど「私は原爆の故とは思いません」と断わられた。今さらだれを恨みようもないけれど、泣いても泣ききれない、憤懣やる方

なき思いだ。いまだに思う在りし日の妻を、あの病院へ行けば、まだあのベッドに妻が寝ているような気がする。しかし現実はいさぎしい。今は還らぬ妻の冥福を祈りながら、あの悲劇を三度くり返すまじと、妻といっしょに闘っている。

妻よ。お前が言ったあの言葉は、この私の生命ある限り、世の人に伝えていくよ。

「もう戦争はこりごりです」

妻も真の平和を願って死んで逝った。明るい平和を夢みながら。今は千羽鶴だけが私のすべてである。



うつし世の運命と心に知りながら

亡き妻おもへば涙こぼるる

(親江会慰霊代表団報告書44・9・13)

わが子をなくして

渡部 和子(長崎)

今から十年も前のことですが、私達一家は現在の篠崎町に住むことになり、そのときに長女と長男二人の子供に恵まれておりました。

長女の智子は五歳で風邪をひき、毎日、日曜でも注射に連れてくるように医者に言われ、私も医者のことを信用して連れていきました。子どもがイヤイヤと泣きじゃくるのを、私は無理におんぶしてまで連れて行き……私もバカでした。

そのうちに、医者は自分の手に負えなくなったのか、青砥の慈恵病院を紹介してくれ、すぐ入院して、三日目に「再生不良性貧血」という恐い病名をもらいました。

主人がさっそくあっちこっちの本屋さんを探し
やと神田の一軒に尋ねる本があったそうです。

もしや誤診ではないだろうか、夜明かしのよう
にして何度も読んだそうです。この病気はどこか
らでも血が噴き出ます。私が面会に行ったときも
具合悪くしていたので、すぐブザーをおして看護
婦さん呼びましたところ、子どもは血を吐き、
私も驚いて、「こんなに苦しんでいる子供を、私
が来なかったらどうするのですか。私はもう家に
帰らずにここにいます」と言いました。すると、
「他の子供に困る。智子さんのお母さんばかりい
ると言われる」と言われましたが、「部屋がなく
ともいいです。廊下でもいいから付き添わせてく
ださい」と頼みました。すると、「婦人科でよけ
れば」とのこと、そこにそのまま四か月いっし
よにいました。

この病気は、血を造る造血器がやられて血が通
わなくなってしまうのです。私も付き添って、
イザという場合に八回輸血してやりました。引越

してきて間もなくのこと、知り合いも少なく、
身内は長崎ですし、「手帳」で長崎の方からいた
だきました。一回に四〇〇ccの血液が必要なので
す。主人はさっそく土建組合に話しに行き、新聞
で献血の呼びかけをし、私は幼稚園に行つて園長
さんにお頼みして、たくさん血をいただくこと
ができました。

が、そのかいもなく、暑い盛りの八月十六日に
短い生命を奪われてしまいました。六歳八か月で、
一年生には四日しか行きませんでした。

こんなに小さくてもわかるのでしょうか。私に
「ママ、おうちに帰って佐ちゃんという赤ちゃ
んを生んでネ」と言うので、「智ちゃんはどうす
るの」ときいたら、「もういいの。智子はお馬に
乗って天国に行つて、一番大きいお星様になるの
……」と言つて、「パパ、パパ、ママ、ママ」で
他界してしまいました。

私は、夜になると大きい星を探して手を合わせ
「もう一度、智子帰つておいで」としきりに泣

きました。

“四十度二分の熱が一週間続くと終わり”と本に書いてありますが、その通りで、死ぬときに、内臓破裂でしょうか、五回位「ポーン」と音をたてて息をひきとってしまいました。

× × × ×

あれはガンと同じようなものだそうです。あのとき、東友会や親江会を私が知っていたら、もしかしてあの子は助かったのではないかと残念でなりません。今度このような子どもができたら、どうしたらよいのでしょうか。私の無念の思いは募るばかりです。



四十五年に佐智博という子供を授かり、四月には四年生になります。智子の分まで可愛がっているつもりです。佐っちゃん

もしきりにお姉ちゃんのことをきくので、言ってお聞かせています。私が朝晩手を合わせると、自分もお線香をあげて手を合わせる事がたびたびあります。お菓子などもまっ先にあげます。

(親江会だより55・7・25)

親江会

江戸川区内在住の原爆被害者の会で、現在二百九名の会員がいる。ヒロシマ・ナガサキの惨禍を体験した者が相寄り、一九六五年に会を結成、親江会と名づけた。親睦と医療生活その他の問題の解決をはかり、あわせて核兵器の廃絶と恒久平和実現のために、多くの区民の協力を得て活動している。平均年齢は六十歳をこえ、心身に障害を持つ病人が多く、経済的にも苦しい状態にある。また子どもの健康や結婚などの問題でも悩み、中には被爆者であること伏せている者もいる。会長相川弘氏。事務局長は臼井武夫氏。江戸川区中央二一四一五。

広島・長崎の被害

昭和二〇（一九四五）年一二月までの間に広島では約一四万人、長崎では七万人が死亡したと推定されている。当時市内にいた人のほぼ四分の一は、当日またはそれから三か月以内に死んだわけである。二つの市は、爆心地を中心に徹底的に破壊され、その上を大火災の炎が荒れ狂った。そして、ほとんど何ものこさない町の姿となった。

二つの都市は、奇襲によっておきた原爆投下で一瞬に、戦闘員・非戦闘員、老若男女をとわず、人間と他の生物、人工の施設・自然環境をとわず、殺りく、破壊された。生き残った被爆者は、からだ・くらし・こころのすべての面で被害をうけ、被害はその後もとどまるところなく持続し時には拡大したのである。

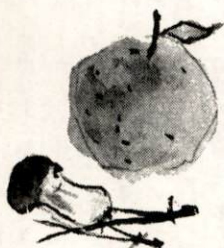
（伊東壮「1945年8月6日」より）

原子爆弾の破壊力

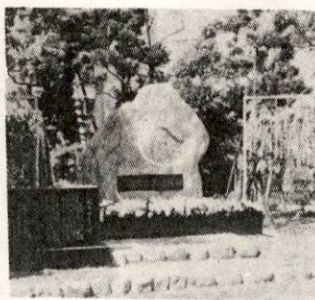
第二次世界大戦中のもっとも大きな通常火薬爆弾は

一トン爆弾であった。広島に投下された原爆（ウランの核分裂）は一三キロトン、長崎に投下された原爆（プルトニウムの核分裂）は二二キロトンに相当するといわれ、史上最大の殺傷と破壊をした。

原爆は、爆発の直後小さな太陽ともいえるような火球となり、摂氏三〇万度の熱を発し、人びとを焼き殺したり、やけどさせたりした。また、数十万気圧の爆風を起こし、街全体を吹き飛ばした。さらに、放射能（主として中性子線とガンマ線）を放出し、黒い雨を降らせ、生き残った人びとに対しても今なお原爆症の苦しみを負わせている。



今年も、暑い日差しが思い出されます。終戦記念日、が訪れます。そして、広島と長崎に太陽のような閃光がきらめき、一瞬のうちに三十万人の命を失って



から三十六年がたちました。

先月二十六日のやはり暑い午後二時、中葛西三丁目、葛西区民館隣の滝野公園に、五百人を超える人々が集まりました。

「原爆犠牲者追悼碑」が完成して、除幕式が行われたのです。

江戸川区にも二百人以上の被爆

関係者が住んでいます。昨年二月頃からその人達を中心になって、追悼碑を建立しようと運動が続けられました。昨年この会の訪問をうけて、いろいろと相

区長随想 五

談されたとき、あの悲慘な戦争を再び起こしては絶対ならないと思ひ、区立公園の中に建て、区で管理しようと決心しました。碑の表には、丸木画伯夫妻による原画が刻まれています。それは、原爆の犠牲になった母子がハトになって空を舞い、平和を訴えているという「平和の図」が描かれています。その前で、彼の日の体験を二人の女性が語られました。それは、つらい、むごい、悲しい思いでした。

長い年月の平和、恵まれ過ぎるくらい今日の生活は、この悲慘な上に築かれてきました。しかし、三十六年もたつて、この思いは薄れてきたのではないだろうか、心新たに、もう一度振り返ってみようではありませんか。

追悼碑の前は、多くの尊い犠牲を無にすることのないよう平和の誓いを新たにすると共に、いま恵まれ過ぎていたのではないかと反省する場でもあるのです。

中野たけ

原爆犠牲者追悼碑ができるまで

一九八一年十二月十四日、「江戸川区に原爆犠牲者追悼碑を建立する会」が、区内の被爆者・宗教・教育福祉・労働など各層の六十名により発会する。翌八二年四月二日、区立滝野公園（葛西区民館となり）への建立につき区当局の了承を得る。四月十二日、丸木位里・俊画伯を迎え、追悼碑に「鳩になった母子」の図を描き、のみ入れ式。そして七月二十六日に追悼碑は完成し、除幕式と第一回追悼式を行う。区内外から

五百名が参列。その後、追悼碑は区内の新しい平和の祈念碑となっている。

なお、第二回追悼式は次のように行われる。

▽日時 一九八二年七月二五日（日）午後一時半

▽場所 区立滝野公園、追悼碑前

▽次第 「原爆瓦」寄贈除幕式、犠牲者名簿奉安、各界挨拶、千羽鶴献納、参列者献花など。

▽第二部 映画会（葛西区民館にて）

「人間をかえせ」「予言」（羽仁進監督）

執筆者紹介

氏名	被爆場所	爆心地 よりKm	被爆当時の年令・職業等	現在
相川 弘	広島市西寺町	一・三	四一歳・会社員	会社役員
浄園 満成	長崎市浦上	〇	三一歳・復員兵(救助活動中被爆)	社会教育指導員
銀林 美恵子	広島市千田町	一・八	一七歳・広島女高師一年	教員
堤 久吉	長崎市外長与町	四・〇	一〇歳・洗切小四年	サービス業
佐々木 玲子	広島市大須賀	一・四	一七歳・安田学院中二年	主婦
久保 享	長崎市稲佐町	五・〇	一九歳・無職	会社員
矢部 キヨ子	広島市皆実町	二・〇	一六歳・県立第二高女四年	事務員
中山 鈴子	長崎市大浦	四・〇	一〇歳・福田小四年	サービス業
本田 孝夫	広島市皆実町	二・〇	一八歳・兵隊	運送業経営
田川 時彦	広島市皆実町	二・〇	一六歳・広島師範予科	教員
梅沢 武次	広島市宇品町	四・〇	二四歳・兵隊	鉄工業
林 きくの	広島市已斐町	二・三	四〇歳・主婦	五五年七月一八日死亡
高木 留男	広島市白島	一・八	二六歳・兵隊	無職
渡辺 和子	長崎市三川町	三・〇	一六歳・無職	主婦

編集を終えて

「私の顔や手をよく見てください。世界の人びと、これから生まれてくる子どもたちに核戦争による死と苦しみを一人たりとも許してはなりません。」

六月二十四日、第二回国連軍縮特別総会で、長崎の被爆者山口仙二さんは自らの被爆写真をかざしながらこう訴えました。三十七年を経た今日、被爆者自身が初めて公的な場から全世界に訴えることになったこの事実を、どう考えたらよいのでしょうか。

被爆者と、そしてほとんどすべての日本人は、被爆直後からありとあらゆる表現で訴え続けているというのに、今ごろになってやっと聴く耳を持つにいったたでもいいうのでし

ようか。いや、聴かざるを得ないほど人類の危機は迫っているというところに違いありません。それにしても、今なお被爆者の証言が求められていることに激しい憤りを感じます。と同時に、〃今こそすべての被爆者が証言を！〃〃今こそすべての戦争体験の継承を！〃と呼びかけたいと思います。はいです。

この証言集のいずれの文章にも、被爆者の苦悩や願い、怒りや悲しみが鋭い告発となって結晶しています。それ故に私たち編集担当者も一字一句を心に刻むように仕事をすすめてきました。これが広範な人々に読まれ、特に子どもたちには貴い贈り物となることを願っています。

作成にあたり、丸木画伯夫妻をはじめ、平和を願う多くの方々のご協力をいただきました。心からお礼申しあげます。

(小林 功)

鳩になって

―江戸川・被爆者の証言―

一九八二年七月二五日発行

編集／発行 江戸川原爆犠牲者

追悼碑の会（代表〓相川弘

西城正倫 浄園満成）

編集委員 山田璋俊 岡田弘隆

羽生雅則 伊藤説翁 堤久吉

銀林美恵子 本田孝夫 杉原

敬三 杉原博子 小林功

発行所 東京都江戸川区東小松

川二の七の十七 泉福寺内

追悼碑の会事務局

電話（六五二）九四二八

印刷所 東京都江戸川区平井六

の四二の一四（有）三誠社

電話（六一七）六一五七